過疎地域における生活基盤型サービス施設の整備水準に関する研究

鳥取大学工学部　正　員　岡田　憲夫
三　協　商　会　正　員　○井手野修一
鳥取大学大学院　学生員　亀田　雄二

1．はじめに　　本研究では、過疎地域における日常レベルの生活行動を営む上での生活基盤型サービス施設（表－1参照）の重要性に着目するとともに、その生活水準と利用パターンとの係わりについて分析する。その際、具体的には、対象地域を匹見町に限定し、住民を対象としたアンケート調査を実施するとともに、その結果を基に検討を行う。

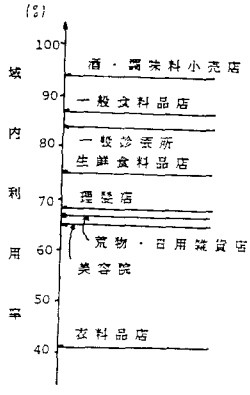
2．対象地域の概要　　対象地域とした匹見町は、中国山地の脊梁部に位置し、島根県の西南端にあり、南を広島・山口の両県境に接している（図－1参照）。本町の総面積の96.9%が山林であることからも分かるように、かつては、木炭と木材の生産地として知られ、林業の町として栄えてきたが、昭和30年代に入り高度経済成長に伴う燃料革命の影響をまともに受け、山林景気が後退し、若年層を中心に都市への人口流出がはじまり、典型的な過疎の町となった。

図－1　匹見町の位置図

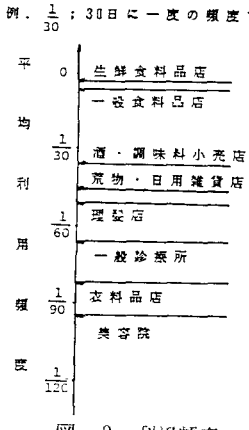
表－1　生活基盤型サービス施設

1	生鮮食料品店
2	酒・調味料小売店
3	一般食料品店
4	荒物・日用雑貨店
5	衣料品店
6	理髪店
7	美容院
8	一般診療所

3．アンケート調査　　上記の目的で匹見町住民を対象にアンケート調査を実施した。実施期間は昭和60年12月から61年1月にかけてである。町役場および行政連絡員の御協力をえて、匹見町の全世帯(911)に配布し、うち470世帯の有効回答を得た（回答率51.6%）。調査内容は概ね、1．各生活基盤型サービス施設の利用パターンに関するもの、2．町外への通勤および車の所有の有無、3．フェイスシート（回答者の年齢、職業等の属性に関するもの）、の以上に分けられる。



図－2　域内利用率



図－3　利用頻度

4．マクロ分析　　図－2は、生活基盤型サービス施設に関する匹見町全体を単位とした域内利用率を示している。域内利用率の高いサービス施設は、酒・調味料小売店、一般食料品店であり、低いものは美容院、衣料品店である。

図－3は、利用頻度を示している。　利用頻度の高いサービス施設は、生鮮食料品店、一般食料品店であり、低いものは、衣料品店、美容院である。

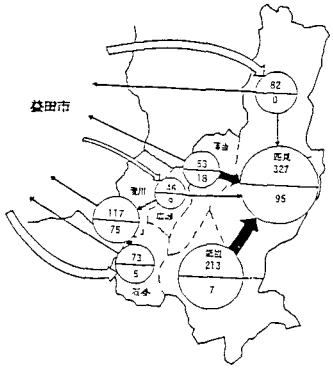
一般的に、域内利用率の高いサービス施設は、利用頻度が高くなっている。反対に域内利用率の低いサービス施設は、利用頻度も低くなっている。ここで、利用頻度の最も高い生鮮食料品店の域内利用率が

図－4　現存施設の立地状況

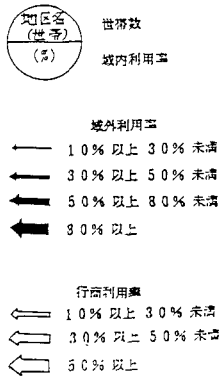
75％と意外に低い値となっているのは、行商の利用率が20％あるためである。これも域内の利用率に含めると域内利用率は95％と非常に高い比率となる。

5．ミクロ分析　　匹見町内における各地区別のミクロレベルでの実証的な分析を行う。各地区の現在のサービス施設の整備状況を図－4に示す。匹見地区は施設数23と最も多いので、匹見町内ではサービス施設の整備水準は高い地区だと考えられる。反対に、石谷、落合地区は施設数2と最も少ないので、整備水準の低い地区だと考えられる。

このような整備水準の高低と利用状況との関連性を検討するために域内利用率の高いサービス施設の代表として生鮮食料品店、低いサービス施設の代表として衣料品店を取り上げて各地区の利用状況について考察する。



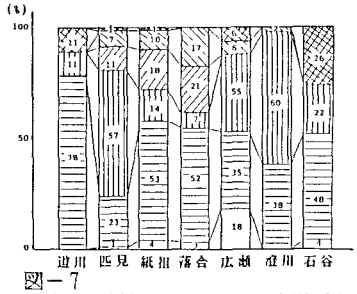
図－5　生鮮食料品店の利用状況図



図－6　衣料品店の利用状況図

図－5から分かるように、生鮮食料品店については、整備水準の高い匹見地区では域内利用率が高く、整備水準の低い落合地区では域内利用率が低くなっている。整備水準の低い地区は、この地区の周辺にある整備水準の高い地区のサービス施設を利用する傾向がある。しかし、同様に整備水準の低い地区であっても、整備水準の高い地区から離れた距離にある道川、石谷地区では町外（益田）からの行商活動が盛んで、行商を利用する世帯が多くなっている。

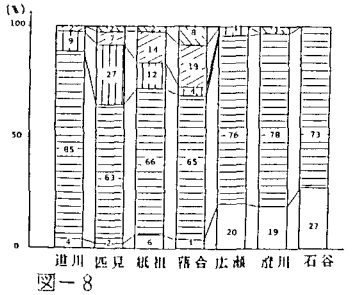
衣料品店については、図－6から分かるように、整備水準の高い匹見地区でさえ、域内利用率は55％とそれほど高くはない。また、この地区の30％以上の回答者は町外（益田）の施設を利用している。その他の整備水準の低い地区でも周辺にある整備水準が高い地区を利用するよりも、そこから遠く離れた町外の整備水準が高い地域を利用する方がはるかに多くなっている。



図－7
生鮮食料品店のアクセス交通手段

図－7から分かるように、生鮮食料品店を利用するためのアクセス交通手段は整備水準の高い匹見地区の場合、徒歩、自転車の比率が多く、逆に整備水準の低い道川や石谷地区では、自動車の比率が多くなっている。しかし、同じ整備水準が低い地区であっても、紙祖や落合地区では、自転車とバイクの比率が多くなっている。これは、両地区では整備水準の高い地区と距離的に近いためであると考えられる。

衣料品店については、図－8から分かるように、全体として自動車の比率が圧倒的に多くなっている。これは利用先の多くが町外（益田）であるためと考えられる。



図－8
衣料品店のアクセス交通手段

6．むすび　　この他種々の興味深い知見が得られたが、詳細は講演時に譲る。

（参考文献）　井手野修一；過疎地域における生活基盤型サービス施設の整備水準に関する研究、鳥取大学工学部卒業論文、昭和61年2月